

レザノフ資料の批判的検討

駒 走 昭 二

キーワード：レザノフ 善六 仙台石巻方言 史料批判

1. はじめに

ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフ（1764～1807）が第2回ロシア遣日使節として長崎へ向かう船の中で記した日本語に関する二つの書物^(注1)、すなわち

『Руководство къ познанію Японскаго языка содержащее азбуку, первоначальныя грамматическія правила и разговоры』（アルファベット、初級文法と会話を含んだ日本語学習の手引き。以下『日本語学習の手引き』とする。）と、『Словарь Японскаго языка по Россі йскому Алфавиту собранный』（ロシア語のアルファベット順に編集した日本語辞書。以下『日本語辞書』とする。）のことを本稿ではレザノフ資料と称することにする。

本資料は、各資料の序文等から判断してレザノフ自身によって記されたとみて間違いない。また、そこに記されている日本語は、この使節団が伴っていた仙台石巻の漂流民たち^(注2)から聴き取ったものであることも明らかである。レザノフ自身が、各資料の序文でそれぞれ「私は皇帝陛下によって祖国に送り返される日本人たちを利用した」「私は同行した日本人たちより日本語を学びました」と明記しているからである^(注3)。そのため、本資料は18世紀末の仙台石巻方言が記された貴重な方言史資料としてこれまで研究が進められてきた。

しかし、その編纂過程を考慮に入れると、その扱いが決して容易でないことに気付かされる。本稿は、他の方言史資料との照合や編纂過程の推察を踏まえた上で、本資料の方言史資料としての特徴を批判的に検討するものである。

2. 仙台石巻方言の反映

2. 1. 先行研究

本資料に記された日本語の特徴を扱ったものには村山七郎（1965）^(注4)をはじめ

多くの論考がある^(注5)。そして、それらでは仙台石巻方言の反映として、例えば下記のような特徴が挙げられている。

- ・ [e] と [i]、[u] と [o] の間で母音交替が見られる。
- ・ 有声子音の前において母音の鼻母音化が見られる。
- ・ ハ行音が [ɸ] 音になる場合がある。
- ・ [se] が [ʃe] となる場合がある。
- ・ 「ちょうま (蝶)」「びっき (蛙)」等の方言語彙が見られる。

他にも多くの注目すべき特徴を挙げることができるが、詳細は先行研究に譲ることにする。

2. 2. 近世仙台方言集との照合

先行研究で挙げられているそれぞれの特徴は、確かに仙台石巻方言の特徴を示すものが多いと思われる。それは、冒頭で述べたとおり、本資料の作成が当該方言話者の協力によって為されたという史実があるからであり、また、これらの方言学的特徴が現代の当該方言と合致または類似する、あるいは日本語全体の歴史に鑑みて十分に存在しうるものだからである。しかし、より厳密を期すならば、当時の当地の方言学的特徴とも照合すべきであろう。もっとも、これに関しては当該方言に限らず、方言史の再構に有効な資料がほとんど残されていないという資料的制約の問題があり、特に音韻に関する検証は困難なのであるが、語彙に関しては、幸い当地に比較的まとまった方言集が存在するため、検証の可能性が残されている。そこで、近世期に編まれた仙台の方言集と本資料の語彙とを比較してみることにする^(注6)。

ここでは、本資料の語彙の中から、近世の仙台方言集にも記載されている単語を挙げる。現代共通語と同じ語形のものは省いてあるので網羅的とは言えないが、いくつかの単語においてその合致が確認できる。

まず、本資料の用例とその片仮名転写（活用している場合は基本形を括弧の中に併記する）を示し、続けて対応するロシア語の意味^(注7)、出現箇所（『日本語学習の手引き』は『手引き』、『日本語辞書』は『辞書』とそれぞれ略記し、それぞれ原本の頁番号を付す）、当該語が出現する仙台方言集の資料名を挙げる。資料名の提示には、便宜上、次のような略称を用いた。『仙臺言葉』^(注8)＝仙、『奥州仙臺こと葉いろは寄』^(注9)＝奥、『燈心野語』^(注10)＝燈、『仙臺言葉（堀田正敦）』^(注11)＝堀、『方言

達用抄』^(注12)＝達、『濱荻』^(注13)＝濱、『濱荻（補遺）』^(注14)＝補、『仙臺方言（櫻田欽斎）』^(注15)＝櫻、『磐水先生隨筆方言抄』^(注16)＝磐。

なお、複数の用例が見られる場合は、多少表現に差異があっても一例のみで代表させ、その他は出現箇所のみを記した。また、方言集の語形については、母音交替などによって多少異形となっているものも意味が一致していれば同語として扱った。

[近世仙台方言集に記載されている本資料の俚言]

- ・ акуто／アクト／かかと（『辞書』174）、仙・奥・堀・達・濱・櫻
- ・ акезу／アケヅ／蜻蛉（『辞書』199）、仙・奥・燈・堀・達・濱
- ・ икаикото／イカイコト／多い（『手引き』195）、達
- ・ огада／オガダ／農婦・婦人（『辞書』9）、達・濱・櫻
- ・ оканаку годзари машень／オカナク ゴザリ マシェン（オカナイ）／安全です（『手引き』215・229・229）、燈・達・濱・櫻
- ・ каипо／カイポ／脱腸、ヘルニア（『辞書』94）、濱
- ・ канангичо／カナンギチョ／トカゲ（『辞書』237）、堀・濱
- ・ кучи куемаштемо／クチ クエマシテモ（クエル）／口を塞ぐ（『辞書』75）、濱
- ・ коге／コゲ／鱗（『辞書』227）、濱
- ・ гошеякимаштемо／ゴシェヤキマシテモ（ゴシェヤク）／怒る（『辞書』239）、仙・奥・燈・堀・達・濱・補・櫻
- ・ коваку гозари масу／コワク ゴザリマス（コワイ）／難しい（『手引き』242）、仙・奥・燈・達
- ・ шимимаштемо／シミマシテモ（シミル）／凍える（『辞書』120）、濱
- ・ скаино／スカイノ（スカイ）／酸っぱい（『辞書』94、『手引き』147・196）、濱・櫻
- ・ чико／チコ／動物の乳房、乳頭（『辞書』43・195）、櫻
- ・ нїю^／ニヨ／干し草の山（『辞書』100・198、『手引き』86）、濱・櫻
- ・ чома／チョマ／蝶（『辞書』9）、燈
- ・ тензушь／テンズシ／剥製、案山子（『辞書』229、『手引き』89）、仙・奥
- ・ дооденшимаштемо／ドーデンシマシテモ（ドーデンスル）／威す（『辞書』79・79・89・89、『手引き』184）、堀・濱

- биша какемаштемо / ビシャ カケマシテモ (ビシャカケル) / 脅す (『辞書』54)、濱
- фиякоку / フィヤコク (フィヤコイ) / 寒い・冷たい (『手引き』195・214)、燈
- фефе、цуби / フェフェ、ツビ / 女性生殖器 (『辞書』66)、濱・磐
- бери、шита / ベロ、シタ / 舌 (『辞書』236)、燈・堀・達・濱・櫻
- маманаки / ママナキ / どもる人 (『辞書』75)、仙・堀・濱
- мамесокусайде / マメソクサイデ (マメ) / こんにちは (『辞書』83・83・83)、
補・櫻
- мемаджи / メマヂ / 瞬間 (『辞書』120)、濱
- модара / モダラ / ぼろ (『辞書』25)、濱
- моджакуримаштемо / モヂャクリマシテモ (モヂャクル) / しわくちゃんにする、
揉む (『辞書』99)、濱・櫻
- якуто / ヤクト / 故意に (『辞書』134、『手引き』195・195)、仙・奥・堀・櫻・
磐

2. 3. 近世仙台方言集の語彙との一致度

上記のとおり、近世の仙台方言集に記載されている俚言が本資料には数多く収載されており、このことから本資料の日本語が当時の仙台石巻方言を反映していることは間違いないと言えよう。

しかし、その一方で、『日本語学習の手引き』は246頁から成っていて、その中には数多くの日本語文が記載されていること、また、『日本語辞書』には3500語以上の日本語が記載されていることに鑑みると、その一致度が異常に低いようにも思われる。もっとも、仙台方言集の各書もそれほど大部ではなく、当時当地の俚言を網羅しているはずもないので、そのようなことも起こり得るのかもしれないが、比較的多くの俚言を収載している『濱荻』でさえ一致する語がほとんど見られないというのには違和感を抱かざるを得ない。『濱荻』は成立時期こそ本資料とは50年ほどの隔たりがあると考えられるが、正編だけで2200語あまりの俚言を収載していて、補遺まで含めると2600語を超えているので、本資料の語彙とも、もう少し一致する俚言が存在する方が自然なように思われる。

また、『燈心野語』や『濱荻』などに出現する「嘘をつく」を意味する「はるなたをこく」や、『仙臺言葉』『仙臺方言 ((櫻田欽斎))』などに出現する「座る」を

意味する「ねまる」などは、本書においてそれぞれ「врать」や「сѣсть」の訳語として出現してもよさそうであるが、ここでの訳語は、それぞれ「усококимаشتهмо／ウソコキマシテモ」、「суваттемо／スワッテモ」などとなっており、方言集とは一致を見ない。

江口泰生（2010）は、本資料における母音無声化や、カ・タ行音有声子音化の表記傾向から、本資料が当時の石巻方言を必ずしも反映していない可能性があることを指摘する。つまり、音声表記の面で、純粋な方言形の反映に疑義が呈されたわけだが、このことは語彙も含めた資料全体の傾向として言える可能性がある。そこで、本資料の史料としての特徴を検討し、そこに記された日本語について、その方言学的性格を再吟味してみることにする。

3. 作成過程から推測される本資料の「日本語」

本書の作成過程については、駒走昭二（2020）で推論を述べたので詳細はそちらに譲り、ここではその要点のみを挙げることにする。

- (1) レザノフは『日本語辞書』の序文の中で「私は同行した日本人たちより日本語を学びました」と述べているが、その日本人はほとんどの場合において善六だったと考えられる。

レザノフたちの遣日使節は、グルーゼンシュテルンの世界周航に同行したものであったが、当時の記録によると、その船上においてレザノフと善六は周りの人々から孤立していたことが伺える。レザノフ自身の文書には彼が善六へ絶大な信頼を寄せていた様子が記されており^(注17)、グルーゼンシュテルンの日記には、二人の親密ぶりによって善六が送還漂流民たちから疎まれていたことが記されている^(注18)。また、善六と送還漂流民たちとの激しい対立を不安視したレザノフは、善六を途中で下船させ、その後は通訳なしで長崎での交渉に臨もうとしている^(注19)。レザノフが、日本語に関しては専ら善六に依存し、他の漂流民を頼っていなかったことが伺えるのではなからうか。

また、津太夫ら送還された漂流民たちからの聴き取りによって大槻玄沢は『環海異聞』を作成し、その中でロシア語の語彙も記しているが、その語彙はボンダレン

コ（2001）が指摘するように、レザノフの『日本語辞書』の語彙と比較すると、量、質ともかなり見劣りするものである。このことも本資料が善六の多大な協力なしには編纂され得なかったことを物語っていると言えよう。

要するに、本資料の日本語は、仙台石巻漂流民の中でも、とりわけ善六がレザノフに教授した言葉がその中心になっている可能性が高いということである。

（2） 善六は言語面で伊勢漂流民の新蔵から多大な影響を受けていたと考えられる。

善六は漂着地からオホーツクを経て、1796年にイルクーツクに移動させられているが、そこで伊勢漂流民の新蔵と出会っている。彼は善六たちよりも10年ほど前にロシアに漂着した神昌丸^{（注20）}の乗組員の一人で、帰化して当地に残留していた。善六は、新蔵の世話を受けつつ、彼が勤める日本語学校で教師補として働いている。新蔵は善六よりも10歳ほど年長であるが、その年齢差に加えて、ロシアでの経験値の違い、それに伴うロシア語運用能力の差、イルクーツクにおける新蔵の社会的地位等を勘案すれば、新蔵と善六の間には、歴然とした力関係が存在したと考えるのが自然であろう。そしてその関係は言語面にも及んでいたものと思われる。日本語学校の開設当初から当地で使用され、ロシア人子弟に教えられていた日本語は、新蔵ともう一人の帰化した伊勢漂流民、庄蔵が話す伊勢方言であったはずで、善六が加わったときには既に伊勢方言が日本語の規範として確立していたはずだからである。ただでさえ、歴然とした上下関係が存在した二人には、加えて日本語学校における規範的な言語使用者としての優位性による差も生じていたと考えられる。

また、善六は文字が読めた^{（注21）}ので、漂流前の日本で書物を読んでいたはずで、そのことはすなわち日本語の書記言語に接していたことを意味する。善六は、普段、自分が身近なところで話す言葉とは異なる日本語、多くの日本人がそれを介して意味を理解することのできる日本語が存在することを多少なりとも認識していたであろう。イルクーツクで新蔵と出会い、日本語教育の現場に立ったとき、自分の話す言葉の方言性を否応なく、意識せざるを得なかったと考えられる。

（3） 善六はレザノフに対して標準的な「日本語」を教授しようとしたと考えられる。

上述のように、善六は日本において既に知識としては共通的な日本語の存在を知っていたであろうし、新蔵との出会いによって、その知見をより具体的なものにすることができたであろう。さらに、異国の地で「日本語を教える」という境遇が、彼に自分の言葉を客観的に見つめる機会を与えたと考えられる。

レザノフは、科学アカデミー総裁N.N.ノヴォシリツェフへ宛てた書簡の中^(注22)で本資料のことを「少なくともイルクーツク日本語学校にとっては、学生たちが何か規則を習得するのを容易にするものとなるでしょう」と語っている。レザノフがロシア人子弟たちの日本語学習に資することを目的の一つとして本資料を編纂したことが伺えるが、それは同時に長崎で日本との交渉に赴こうとしていたレザノフ自身の日本語学習のためでもあったはずである。レザノフから絶大な信頼を得ていた善六であれば、当然そのことを把握していたであろう。

また、善六は1804年にロシアに漂着した慶祥丸^(注23)の乗組員たちに対して「日本商買相初候得は、通詞致し～」と語っている^(注24)ように、「通詞」として日本とロシアの架け橋になるという希望を抱いていたようである。

要するに、ロシアにおいて自分の言葉を客観視する機会を得て、レザノフの意図を知っていたであろう善六が、自分の言葉をそのまま素朴にレザノフに教授したとは考えにくく、おそらく、多分に「日本」を意識した日本語話者として、多くの人に通じる標準的な日本語をレザノフに教授しようとしたのではないかと考えられるのである。

4. 仙台石巻方言との不一致

これまで述べてきたように、本資料は18世紀末の仙台石巻方言を明らかに反映している一方で、その反映は不十分であるようにも思われるが、それは本資料の作成に深く関わった善六が、多分に標準的な日本語を著者レザノフに教授しようとしたためであったと考えられる。ここで言う標準的な日本語とは、現代における標準語や共通語に相当するというわけではなく、あくまでも善六が、そのように判断した日本語ということである。その判断には上述のとおり、伊勢漂流民の新蔵の言葉が関わっていると思われるが、では、そのことは本資料のどのような表現に表れているのであろうか。

4. 1. ウ音便

現代においてワ行五段活用動詞の連用形が、東日本では促音便形、西日本ではウ音便形で現れることはよく知られている。『方言文法全国地図』（国立国語研究所）や大西拓一郎（2016）で、例えば「買った」の各地での語形を見ると、確かに新潟、岐阜、愛知を西端とする東日本のカッタ類とそれより西のコータ類に、ほぼ東西が対立するように分布している。

本資料ではどのように記されているのであろうか。ここでも「買う」の連用形、特に「テ」の付く語形に注目してみる。全部で次の4例が見られる。（露）としてロシア語文の意味、（日）としてそのロシア語文に対する日本語訳をキリル文字と片仮名転写で示す（下線部は該当箇所）。

- ①（露）：【本を】買うことができますか？

（日）： наримасу май ка кооттемо арео ? / ナリマス マイカ コーッテモ アレオ ? (『手引き』243)

- ②（露）：せめて、絵図だけでもここで買うことができますか？

（日）： наримасумаика соремадено учини кайтемо едзуо кокоде ? / ナリマス マイカ ソレマデノ ウチニ カイテモ エツオ ココデ ? (『手引き』243)

- ③（露）：それなら、許されますが、高いです。

（日）： арева юицукимасу кайтемо пакари ясуку годзари машень. / アレワ ユイツキマス カイテモ パカリ ヤスク ゴザリ マシェン. (『手引き』244)

- ④（露）：買う

（日）： каоте́мо, каимаштемо / カオテモ, カイマシテモ (『辞書』161)

本資料は前述のとおり、仙台石巻方言を反映していることが明らかなので、当然、促音便形であるカッタ類の使用が期待されるところであるが、実際にはそれらは見られない。①はウ音便形と促音便形が混在したような語形であり、②③も促音便形ではなく、子音が脱落し母音が残った形である。④は完全にウ音便化した形と見てよいのではなかろうか。ウ音便形は、この「買う」意外にも、「сопооте / ソローテ

／揃うて」（『手引き』213・217・217・220・221）や、「нароо／ナロー／習う」（『手引き』243）等の例が見られる。促音便形も2例（「цукатте／ツカッテ／使って」（『辞書』164）、「мукатте／ムカッテ／向かって」（『辞書』171）の各1例）見られるが、全体としてウ音便あるいは子音脱落の語形の方が優勢である。これをどのように解釈すべきであろうか。ウ音便形と促音便形の東西対立の成立については諸説あり、本資料の用例をもって、かつては東日本にもウ音便形が存在した証左とすることも可能なかもしれないが、筆者は、東国系抄物に散見されるウ音便形がおそらくそうであるように^(注25)、本資料の例も標準的な日本語あるいは西日本方言を意識した結果なのではないかと考える。前述したように、新蔵の言葉の影響を受けたと考えた方が無理がないように思われるのである。彼の話す伊勢方言あるいは、それとの接触によって生じた共通語への意識によって、善六が仙台石巻方言とは異なる語形をレザノフに教授した結果なのではなかろうか。

4. 2. 方向を示す「さ」

上記の現象は、仙台石巻方言としては、本来期待されない方言形が出現していた例であるが、反対に本来期待されるはずの特徴的な方言形が出現しない場合もある。例えば、助詞の「さ」である。現代の東北地方の「さ」は、『方言文法全国地図』の図19～27が示すように、使用状況こそ地域によって様々であるものの、概して共通語の「へ」や「に」に相当する意味を広く担っていると言えよう。したがって、本資料でも多くの「さ」の使用が期待される場所であるが、実際には、ほとんど用いられていない。『日本語学習の手引き』では、「さ」が期待されるような場面で「に」や「い」で表現されている例が16例、「さ」の例は1つもない。また『日本語辞書』では、「に」「い」が7例、「さ」は1例のみである。これはどのように解釈されるべきなのであろうか。

一つの可能性としては、小林（2004）が推察するように、東北地方の「さ」は今でこそ多様な用法を持っているが、以前はもっと狭い用法しか持ち得なかったと考えられるので、本資料には、そのことが反映してわずかな用例しか出現しないという見方ができるかもしれない。もう少し用例を細かく見ていくことにする。『日本語学習の手引き』から2つの例を挙げよう。

⑤(露)：こちらには、よくいらっしゃるつもりですか。

(日)：токи-токини маиримасука кокони?／トキ-トキニ マイリマスカ
ココニ? (『手引き』240)

⑥(露)：江戸への郵便物はいつ発送されていますか。

(日)：ицуно дзibunни фикякува таджимасуру їедои?／イツノ ギブ
ンニ フィキヤクワ タヂマスル イエドイ? (『手引き』216)

これらではいずれも「移動の目標」や「帰着点」を示す場面で「さ」ではなく「に」や「い」が用いられている。このような例が『日本語学習の手引き』『日本語辞書』では多数見られ、全部で19例存在する。期待通り「さ」が用いられているのは『日本語辞書』に見られる「сагиса икимаштемо／サキサ イキマシテモ／先に行く」の1例のみである。この他に「存在」を示す場合の「に」も4例見られる。

「移動の目標」や「帰着点」は、前述の小林隆(2004)が指摘するように、東北地方における「さ」の用法としては原初的なものであり、よく知られている「京へ筑紫に坂東さ」もこれらの用法のことを指していると考えられるが、そのような文脈でも「さ」が用いられず「に」「い」が用いられているという本資料の状況は、「さ」がまだ幅広い用法を獲得する前の時代の様相が反映された結果であるとは考えにくい。やはり、ここでも新蔵の影響を受けた善六によって、西日本あるいは標準的な表現が採用された結果であると考えた方が無理がないように思われる。

5. 結びにかえて

レザノフ資料が18世紀末の仙台石巻方言を反映していることは間違いない。しかし、その反映は不十分なものであったと言うべきであろう。それは、北村一親(2009)が指摘するように先行のロシア資料の影響が考えられることや、浅川哲也(2015、2016)が指摘するように本資料がレザノフと日本人方言話者との音韻上の理解が重なる範囲内で産出されたものであるという外国資料ならではの問題も影響していると思われるが、それに加えて、本稿で述べたように、協力者である善六が持つ日本語観も影響していると考えられる。その日本語観は、善六自身の素養だけによって築かれたものではなく、伊勢漂流民新蔵との出会い、イルクーツクでの日本語教師としての経験、日本とロシアとの架け橋になろうとした彼の責任感や希望が形成し

たものかもしれない。

レザノフ資料を扱うには史料批判が不可欠であろう。それは本資料を無効化する消極的な作業ではなく、本資料の研究を洗練させ、より有効な方言史資料とするための必要な作業であるとする。語彙面における標準語の混入、伊勢方言の影響など明らかにすべきことは多い。今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿では、宮城県図書館蔵のマикроフィルムを利用させていただいた。記して感謝申し上げる。
- (2) 1793年に仙台石巻から出港し、翌年、アリューシャン列島の孤島に漂着した若宮丸の乗組員。石巻出港時は16名の船員がいたが、途中で亡くなった者やロシアに残留した者もいて、使節団の船に乗船していたのは津太夫、左平、儀兵衛、太十郎の4名と、ロシアに帰化し通訳官として乗船していた善六の計5名であった。木崎良平（1991）80-90頁等参照。
- (3) 日本語訳は田中継根（2001）130頁、8頁参照。
- (4) 但し、ここで挙げられている特徴はO. П. Петровの指摘によるものである。
- (5) 村山七郎（1965）の他に、ボンダレンコ（2001）、上村忠昌（2002）、北村一親（2009）、江口泰生（2010、2012、2013）、浅川哲也（2015、2016）等がある。
- (6) 菊池武人（1995）を利用。
- (7) 日本語訳は浅川哲也・グリブ ディーナ（2014、2015）参照。以下同じ。
- (8) 1720年に連歌師猪苗代兼郁が著した仙台方言集。地方方言集の先駆けとされる。外題は『仙臺方言』。菊池武人（1995）参照。
- (9) 注8の広本。略本である『仙臺言葉』に約60語を追加しているだけでなく、掲載語彙に多少の異同が認められるため、ここでは略本、広本ともに調査対象とした。成立時期や略本との関係については未詳。遠藤仁（2000）参照。
- (10) 1738年頃に、大北溟、岡文鶴によって編纂された仙台方言集。
- (11) 安永～天明年間に堀田正敦が著した仙台方言集。成立年代は未詳。注8の『仙臺言葉』を参考にして書いたものと考えられる。菊池武人（1995）参照。
- (12) 1827年に贅庵によって編纂された仙台方言集。江戸言葉と対比されている。菊池武人（1995）参照。
- (13) 1813年頃に伊達家の侍女で江戸藩邸に勤めていた匡子が著した仙台方言集。江戸言葉との対比や語義説明がある。菊池武人（1995）参照。
- (14) 上記の『濱荻』とは別人の手によって作成されたと考えられる補遺。菊池武人（1995）参照。
- (15) 1817年頃、櫻田欽斎によって著された仙台方言集。詳細な語釈がある。菊池武人（1995）参照。

- (16) 大槻磐水こと大槻玄沢が著した随筆のうちの方言に関する記述。
- (17) 大島幹雄 (1996) 132-133頁参照。
- (18) 羽仁五郎 (1966) 88-89頁参照。もっとも、グルーゼンシュテルンとレザノフも激しく対立していた (大島幹雄 (1996) 84頁、123-126頁参照) ので、彼のレザノフに対する評価は多少差し引いて考える必要があるが、レザノフが善六を特に頼っていたこと自体は他の乗船者の記録や状況から判断しても間違いなさそうである。
- (19) 「N.P.レザノフからアレクサンドル一世への上申書 (1804年 8月16日)」(塩谷昌史・畠山禎 訳)、平川新 (2004) 73頁。
- (20) 船頭は大黒屋光太夫。1782年に伊勢の白子を出港し、江戸に向かう途中で嵐に遭遇。翌年、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した。木崎良平 (1991) 52-55頁等参照。
- (21) 『北邊探事』による。大友喜作 (1972b) 252頁、北海道古文書解読サークル (2011) 198頁参照。また、リコルドの『日本沿岸航海および対日折衝記』からも善六が日本語の読み書き能力を有していたことが伺える。木崎良平 (1997) 225-226頁参照。
- (22) 「N.P.レザノフから皇帝アレクサンドル一世付属秘密委員会委員、科学アカデミー総裁N.N.ノヴォシリツェフへの書簡 (1804年 8月20日)」(渡邊聞・小野寺歌子 訳)、平川新 (2009) 88頁参照。
- (23) 船頭は陸奥国出身の継右衛門文内。1803に函館の白尻を出港した後、嵐に遭遇し、翌年、北千島のポロムシリ島に漂着した。漂流民たちは、その後、アイヌ、ロシア人に救助され、ペトロパヴロフスクに連れて行かれ、そこで、レザノフの判断により下船させられ当地に滞在していた善六と出会った。木崎良平 (1991) 102-105頁参照。
- (24) 『通航一覧』巻三百十九。林樵・宮崎成身 (1940) 第八196頁参照。『通航一覧』は大学頭林復斎らが編纂した1566年から1825年頃までの対外関係史料集である。
- (25) 小林隆 (2013) 参照。

引用文献

- 浅川哲也・グリブ ディーナ (2014) 「ニコライ・レザノフ『日本語理解の手引き』(邦訳)」(『人文学報』488、首都大学東京人文科学研究科)
- 浅川哲也・グリブ ディーナ (2015) 「ニコライ・レザノフ『露日辞書』(邦訳)」(『人文学報』503、首都大学東京人文科学研究科)
- 浅川哲也 (2015) 「ニコライ・レザノフ『日本語理解の手引き』にあるキリル文字で表記された日本語の特徴について」(『近代語研究 第十八集』、近代語学会、武蔵野書院)
- 浅川哲也 (2016) 「ニコライ・レザノフ『露日辞書』にあるキリル文字で表記された日本語の特徴について」(『近代語研究 第十九集』、近代語学会、武蔵野書院)
- 江口泰生 (2010) 「レザノフ資料の日本語」(『語文研究』108・109、九州大学国語国文学会)
- 江口泰生 (2012) 「レザノフ「会話」からみた18世紀末石巻方言のマスとマスル」(『国語国文』81-12、)

- 江口泰生（2013）「レザノフ『日本語学習の手引き』第9章「会話」篇からみた18世紀末石巻方言の敬語」（『語文研究』116、九州大学国語国文学会）
- 遠藤仁（2000）「解題 仙台言葉以呂波寄」（『近世方言辞書 第2輯』、港の人）
- 大島幹雄（1996）『魯西亜から来た日本人 漂流民善六物語』、廣済堂出版
- 大友喜作（1972a）『北門叢書 第四冊 環海異聞』、国書刊行会
- 大友喜作（1972b）『北門叢書 第六冊 北棧遺聞・北邊探事』、国書刊行会
- 大西拓一郎（2016）『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』、朝倉書店
- 上村忠昌（2002）「レザノフ資料（1803～4）による18世紀末期の宮城方言」（会報『ゴンザ』49）
- 菊池武人（1995）『近世仙臺方言書 翻刻編』『続翻刻編』『研究編』、明治書院
- 木崎良平（1991）『漂流民とロシア』、中央公論社
- 木崎良平（1997）『仙台漂流民とレザノフ』、刀水書房
- 北村一親（2009）「ゴンザ、タタリノフ、レザノフ各語彙の比較研究」（北村一親・久保静佳・鳥谷部茜・中村あずさ・齋藤いく、『アルテスリベラレス』85、岩手大学人文社会科学部）
- 小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』、ひつじ書房
- 小林隆（2013）「書評 柳田征司著『日本語の歴史1 方言の東西対立』」（『日本語の研究』9-2）
- 駒走昭二（2020）「レザノフ資料と方言史研究」（『人文研究』200、神奈川大学人文学会）
- 田中継根（2001）『露日辞書・露日会話帳』、東北大学東北アジア研究センター
- 羽仁五郎（1966）『クルウゼンシュテルン日本紀行 上巻』（改訂復刻版 初版1931年）、雄松堂
- 林燿・宮崎成身（1940）『通航一覧 第七 第八』、泰山社
- 平川新（2004）『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第1集』、寺山恭輔・藤原潤子・伊賀上菜穂・畠山禎 編、東北大学東北アジア研究センター
- 平川新（2009）『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第4集』、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子 編、東北大学東北アジア研究センター
- 北海道古文書解読サークル（2011）『古文書解読叢書十一 解読『北邊探事』』、北海道古文書解読サークル
- ボンダレンコ（2001）「H.J.L.レザノフの『日本語辞典』における仙台方言の特徴」（『東北アジア研究』5、東北大学東北アジア研究センター）
- 村山七郎（1965）『漂流民の言語』、吉川弘文館

付記

本研究は2017～2019年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（課題番号17K02774）の助成を受けている。

（こまばしり・しょうじ／神奈川大学教授）